

## 日本語の焦点二重化構文における移動と削除

秋山正宏

愛媛大学

日本語には、焦点句(e.g.『坊っちゃん』を)が初頭位置と元位置で繰り返される(1)のような構文(以下、焦点二重化構文)が存在する。

(1) 『坊っちゃん』を, John が『坊っちゃん』を読んでたよ。

この構文では, (a) 複数の焦点句の繰り返し (e.g. John が『坊っちゃん』を, 今日は John が『坊っちゃん』を読んでたよ, 以下多重焦点二重化)および (b) 名詞句の左枝修飾語句の繰り返し(e.g. とても長大な, John がとても長大な論文を読んでたよ)も許容される。興味深いことに, 多重焦点二重化においては, 左枝修飾語句の生起は末尾の焦点句に限定される(e.g. John がとても長大な, 今日は John がとても長大な論文を読んでたよ/\*とても長大な, John が, 今日はとても長大な論文を John が読んでたよ)。

この発表は, まず焦点二重化構文が初頭位置の焦点句(FXP<sub>1</sub>)を含む節(Clause<sub>1</sub>)と元位置の焦点句(FXP<sub>2</sub>)を含む節(Clause<sub>2</sub>)からなる重文構造を有することを示す。この内 Clause<sub>1</sub> は表面上 FXP<sub>1</sub> のみを含む形で削除の適用を受けるものと考えられるが, この発表は上述の多重焦点二重化における左枝修飾語句の出現パターンに基づき, Clause<sub>1</sub> における削除および焦点句の移動の姿を明らかにする。同時に左枝修飾語句に関し, (多重)焦点二重化構文と同様の出現パターンを示す関連構文についても言及する。